

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別取扱郵便物誌第六二七号
明治三十一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一圓一日發行)
平成二十年一月一日発行(第百一十一卷第一号)

ホトトギス

一月号



俳句随想〔三三七〕

汀子

朝立の無きが如くの庭なりし

八月二十七日付けの朝日俳壇に私はこの句を特選に採り句評も書いた。すると果してどうか予期したように一通の投書があった。その人の論点を整理すると、(1)朝立は季語ではない。(2)朝立は朝早く旅立つことで、句評の様な俄雨の意はない。というものである。

たしかに朝立は季語ではない。それは私も知っている。しかし朝立の意味は、①朝の旅立ちの他に、②夕立に対して朝方に降るにわか雨という意味が厳然とある。私は歳時記も広辞苑も引いて確かめた上で取り上げたのである。それは何故か。一言で言えば選者としての私の挑戦であり、期待でもある。季節の言葉として季節感があり、詩趣があり、しかも立派な作品を伴う時は、その言葉はいずれ新季題として認められる。この場合朝立を詠んだ勝れた作品が後に続くかどうかであろう。季題にしても、季題の含意にしても決して固定したものと決めつけるのではなく、新しい感性、新しい時代性を注入して行ってこそ伝統は生き生きとつながって行くのではないだろうか。

旬日記

汀子

平成十九年一月六日 菅屋ホトトギス会

一冊の本読初と決めてをり寒に入る雨の朝となりけり
菜りたるところの続き読み始む
建て替へて聞かざる噂嫁が君

一月七日 関西野分会

七種を祝へば仕事待つてをり
雪降れば思ひ出ばかり甦る
吹雪くるとは本当でありしかな
あなどりてをりし予報の吹雪来し
子等帰り残るすきやき寒卵

一月七日 下萌句会

読初の一書決つてをりにけり
三寒の客とていかにもてなさん
吹雪止みこんなに晴れてしまひけり
一瞬の吹雪に虹の立ちしとて

一月八日 ロイヤル俳壇

わが幸を分ちたきとも冬薔薇
冬薔薇を抱き余りし力かな
朝焼に浮ぶ初日でありしかな
寒の入荒れし一日となりしこと
一年のこの日初日を見とどけし

一月九日 大阪倶楽部

言はずとも十日戎に寄られしと
手に軽き福笹なれど重きもの

一月の庭にはじまるはかりごと
雑多なる机上めでたき初句会

一月九日 綿業倶楽部

初空として青空を賜りし
体調をいとふことより去年今年
福笹をもらひしことも吉として
お雑煮の出ること承知してよりは

一月十一日 清交社

乗初や常の心を取り戻し
双六の賽の勢ひ余りけり
初戎よりの帰りと知られけり
間違へし新年会の一時間
ふり返ることなく走る今年かな
案の定春著召されて来られけり
秘めごととならぬ買初とはなりぬ

一月十二日 工業倶楽部

渦ほどきゆく葉牡丹の大きさよ
渋滞の先に出初のあるらしく
葉牡丹と分りはじめて玄関に
一月十三日 偲ぶ会

一月十三日 偲ぶ会

明るくて寒くて富士の見ゆる庭
喋る間に富士は雪雲着てしまふ
一月十四日 偲ぶ会

一月十六日 有恒倶楽部

冬ざれの庭に箒目新しく
太陽を池に沈めて冬の雲
スケジュール風邪引くこともままならず
ナビゲーター応へくれたる春隣

一月十六日 無名会

富士の雪見しより旅となりけり
雪踏みて富士の裾野でありにけり
狭庭とてどこかに植えて青木の实
雪国に思ひ出を追ふこともして
雪吊の縄ばかりとも見えてをり
雪多き裏富士よりのコースとる
計画の中に動かぬ青木の实

一月十七日 夏潮句会

朝の雨上り焚火のはじまれる
寒牡丹咲かせて心奢りけり
いつまでも焚火の匂ふ女かな
焼いもが焼けてゐますと火掻棒
焼諸が隠れてゐると知らざる
焦げてゐる焼諸の嵩半分に

一月二十五日 きつねの会

松過の仕事の山を崩さねば
手に触れて消えて舞ふ雪つのも来し
快晴といへる寒さの大都会
一月二十六日 時雨会

一月二十六日 時雨会

福少し引寄せてをり初笑
懸想文などもどかしやく
寒肥の行き渡りたる庭の色
初笑よりはじまつて三姉妹
チューリップ配られしより春隣

一月二十八日 野分会

大都会には寒月の似合ふピル
寒卵上京前の膳にあり
寒月に東京タワー凛とあり
体調の少し回復寒卵

廣太郎句帳

廣太郎

平成十九年一月十日 一水会

寒月を右に左に祝ぎの旅
数の子の音に目覚めてゆきにけり

一月十一日 土筆会

人日や小諸の虚子に会ひし人

一月十三、十四日 年尾徳会

もう少しはつきりせんか雪の富士
富士現れて隠れて現れて冬うらら
こつちいやあつちその右寒昂

一月十四、十五日 年寿会

冬うらら呼べばすぐ来る君の杖
石尊食むより年寿会心かな
日向ぼこテトラポッドは猫の庭
月冴ゆる朝日に主役譲りつつ
臘梅の一と震へして香を配る
笹鳴にハーブの目覚めゆく朝
句やかな君に臘梅従へり
君の過去聞けば寒灯潤みたる

一月十六日 草木瓜会

寒の雨心を濡らすほどでなく
のらり去年くらり今年を迎へたる

寒の雨句碑の歳月明かしゆく
一月十七日 登高会

千両といふつましき主張かな
丸々と雀千両揺らしけり
雪折に杉の千年幕閉ぢる
雪折に皮一枚の生きてをり

一月十八日 蕉心会

一月の海へ急げる水の色
都鳥ハイジャンプせし白さかな
冬の川揺れて日の斑を散らしけり
蕉像の視線の先の冬木の芽
寒肥の下町風といふ嵩に
寒椿三角池の黙を解く
春著着て背面跳びはしなはん
一輪に探梅心芽生えけり
侘助に思ひ出の席あらたまる

一月二十日 朝日カルチャー若草句会

冬薔薇抱いてアンコールはシヨパン
冬さうび赤の存問ありにけり
冬薔薇一本胸に棺閉ぢる
冬薔薇一本に君輝けり

一月二十三日 若水句会

海の綺羅山の黙より春隣
ビル街といふ山脈に風花す
日表に猫日裏には寒雀
河馬欠伸して寒雀散らしけり
春隣とは丸ビルの丸さにも

一月二十四日 目黒学園句会

真紅てふ淋しき色や冬薔薇
片付けは七種粥を炊きてより
寒灯の消ゆることなき丸の内
寒灯の文字となりゆくビルの窓
寒灯下序の舞といふ華やぎに
一月二十八、二十九日 はつばい吟行会

雲去来して雪山を正しゆく
大雪を期待したんがこれかいな
白銀を統べ寒林でありにけり
雪煙あげて子犬の戯れあへり
避寒宿てふわが家めくもてなしに
片品の風に氷柱の育ちゆく
息白くお座りお手をさせてをり
雪降つて雪止んで雪積りけり
雪の上でけんくわばつかりしなさんな
軒垂雪解の序曲奏でをり
犬走り人悴んでをりにけり
淡々と日差ふはりと雪の肌
ひよつとしてノックするのは雪女郎
君を見るのはちよと雪眼癒すため
一月三十日 祝「ひげ増」再開

寒灯の眩き中に再開す

一月三十一日 祝「マウイホトギス会」十周年

春光の端より十年言祝げり
一月三十一日 祝「若竹」九百号

若竹を七十五年守る手練
今年竹大山脈に育てたる
伝統といふ枝ぶりも今年竹

雑詠

廣太郎 選

親子句碑生れし六甲星流れ 神戸 千原叡子
披かれし句碑を見守る露の荘 同
青勝ちに動く晩夏の万華鏡 同
禁煙の席に南蛮煙管かな 八尾 岩垣子鹿
汚点なく濁点もなく吾亦紅 同
ギヤマンの薄き器に冷し酒 同
これよりの句碑星の夜も霧の夜も 神戸 山田弘子
独り居はよろし淋しと茄子を焼く 同
地藏会や草の匂ひの子が過ぎぬ 同
震災に迂回余儀なき露の旅 長岡 安原 葉
露けしや三国に偲ぶ物語 同
阪神の気になる無月明りかな 同
朝露の日の出とともに光り初む 東京 大久保白村
朝露にまみれし社家の竹箒 同
太陽に食べつくされし朝の露 同
ご本家の寒き仏間に通されて 福岡 松尾緑富
よく来たと炬酒をすゝめらるゝまゝ 同
こよなくも野山の錦車窓にす 同

閉ざされし山莊露を置くばかり 神戸 立村霜衣
化粧してなほ冷やかな顔となる 同
息苦しきまで鶏頭赤くあり 同
夕月夜街の時計の灯りけり 大阪 塙 告冬
鈴虫や夜の雨音に気付きたる 同
珍しく朝の散歩や秋の雲 同
しなだれて形つかめぬカンナかな 東京 内藤呈念
秋団扇まるで病歴自慢会 同
鯛雲模様にしたるガラスビル 同
まだ言葉もたざる嬰に虹高し 熊本 岩岡中正
胸中の湖を蟬鳴きわたる 同
しんがりをもの大きな日傘行く 同
星空のしづくのやうな鉦叩 神戸 長山あや
考への奥へ奥へと鉦叩 同
さらさらと風湧くところ竹の春 同
草々の高さ極めて秋彼岸 東京 橋本くに彦
安達太良の風透き通る秋彼岸 同
雲ひとつだに無き里の秋彼岸 同
新秋やジャズ聴く夕べありてより 同
星飛んで山莊の夜の更け易し 龍ヶ崎 今橋真理子
星飛んで宇宙に色の生まれけり 同
虚子と会ひ風生とあふ花野かな 明石 中杉隆世
白樺も櫟も秋の樹となりぬ 同
吾亦紅ひとりひとりとなりしかな 同

雑詠句評（十二月号より）

くに彦・雅　・仁　義

暮潮・純也・弘子

一步・しげ人・昭代

比奈夫・廣太郎

父の髭剃るも看病籠枕 八五季 栗林眞知子

病人が一人家に居ると言う事は、何につけても大変な事である。

その介護には期限も無く、先々の不安を抱えながらの毎日である。

筆者もそんな体験をして、両親を見送ったのでこの句の一齣は痛いほど伝わって来る。おりしも暑い日が続くなか、その父の伸びて来た髭を作者は当つたのである。そして少しでも涼しくとの心配りで、枕も籠枕に替えたのであろう。父のさっぱりとした様子を見守る作者。そこには父と子の静かな時間の流れの中で、無言のやりとりが聞こえて来る様である。作者のお父上は俳人である。薬石の効無く身罷られたのを知つたのは、初七日を過ぎての事であった。ここにお父上様のご冥福を祈ると共に、作者のあの明るい笑顔が一日も早く戻って来ることを、願うものである。

（くに彦）

この句の中の「父」とは申し上げるまでもなく、去る平成十九年八月六日に幽明界を異にされたホトトギスの重鎮原三猿子氏である。作者は最後まで看病に専念されていたのである。病床の父上の髭を剃って差し上げるといふ動作と、季題「籠枕」が何とも切なく響きあう。（廣太郎）

露の世といふに永らへぬる身かな 八五季 原 三猿子

露の世とは、長い人生を意義深く生き抜いて来られたからこそ言える事だと思ふ。ホトトギスの重鎮として、数知れぬ方々をホ句の道へ導かれて来られた事は、周知のことである。振り返りみて、沢山の成し得た事に、来し方の生き様を満足なさっているとは思われるが、残された年月に、まだ何かを成さんと、「永らへぬる身」と発せられたのでしょうかとも思ふ。

大正三年生れの氏と、筆者の父とは同じ歳で、ご息女の眞知子さんと、お互いの長寿の父親の健康の話などを、有難いと話しあつたのはついこの間のような気がするが、訃報が入つたのは数日前のことで愕然とした。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

（雅）

奇しくも副巻頭は、巻頭で詠まれていた原三猿子氏である。御歳の事を申し上げるのは失礼だが、享年は満九十二歳であらせられた。今の時代でも天寿を全うされたと言えるかも知れないが、病床でどのような「露の世」を思われていたのだろうか。人生をしみじみと感じさせてくれる。（廣太郎）

天地有情

江子選

はなやかに日照雨渡れり芒原 箕面 井上浩一郎
 竹の春隠れに水の光かな 同
 みちのくの夏やあなたはもう居ない 東京 稲畑廣太郎
 岩といふ神の造化や露涼し 同
 新句碑や露の伽石侍らせて 長岡 安原 葉
 新句碑に佇つ新涼の風つれて 同
 逆縁の百寿の夏も空しかり 豊中 瀧 青佳
 孤独てふ恐ろしきもの明易き 同
 竇戸入れて古町らしき路地となる たつの 浅井青陽子
 なにもかも長女委せや盆供養 同
 願はくば一代無病土用灸 神戸 後藤比奈夫
 風蘭に来てをり千の風となり 同
 臥待の月出でにけり寝まりけり 樞原 稲岡 長
 花野から飛鳥の底の石舞台 同
 雷去りて六甲山の一塊に 大阪 佐土井智津子
 炎天を来て聖堂の小暗さに 同
 カンナの黄カンナの赤も嫌ひなり 東京 今井千鶴子
 盆過ぎて墓地の沙汰など縁つづき 同

大夕立とて天界の一と雫 金沢 藤浦昭代
 名刹の一石を借り旅端居 同
 むかしむかし芒の中に棲んでゐし 神戸 長山あや
 人去にて神代の風の芒原 同
 一天の波打つて大夕立かな 熊本 岩岡中正
 ひたひたと汀ありけり霊迎 同
 秋深きところに立つてをりし人 明石 中杉隆世
 ただひとり花野に立てる女かな 同
 冬の夜の回想いつも一人なる 福岡 松尾緑富
 今の世に河豚に中ると思はねど 同
 一升の栗を剥きたる肩のこり 新見 黒杭良雄
 還暦の友の計報や秋の風 同
 揚花火熱海山の灯海の灯に 熱海 嶋田一步
 空うめとめの花火として終る 同
 山頂へ打つ祝電や夜の秋 神戸 山田弘子
 労ひのひと言に汗引いてをり 同
 手花火へ手花火の火を渡しけり 東京 橋本くに彦
 ねつとりと晩夏の海へ隅田川 同

天地有情句評

汀子

孤独てふ恐ろしきもの明易き 豊中 瀧 青佳

ふと孤独を実感する夏の暁。

簀戸入れて古町らしき路地となる たつの 浅井青陽子

昔ながらの暮らしぶりも大切にした瞬間。

願はくば 一代無病土用灸 神戸 後藤比奈夫

大病を寄せつけない生涯を願う作者の心配り。

臥待の月出でにけり寝まりけり 榎原 稲岡 長

夜々の月の出の変化に従って行く。

雷去りて六甲山の一塊に 大阪 佐土井智津子

鎮まった六甲山。(以下略)

芒原の変幻自在を誘う日照雨。

はなやかに日照雨渡れり芒原 箕面 井上浩一郎

岩といふ神の造化や露涼し 東京 稲畑廣太郎

露の降りた岩の輝きを涼しく捉えた。

新句碑や露の伽石侍らせて 長岡 安原 葉

新しい句碑の誕生に伽石の存在。